〔書　評〕

三根谷徹著『中古漢語と越南漢字音』

高松政雄

一

本書の刊行を一途に推進せしめて来た、その門下生たる編集者の「後記」に依れば、当初は、本著者三根谷徹の全著作を集め、それらをば、中国音韻学、越南語学、及び、言語学として纏め、以て三巻に分かちて世に出だすという計画であったと言う。それが宛らに実現せば、そは正に三根谷言語学の集大成となるべかりしものであった。しかれども、今、眼前にあるは、その如きの貌のものならざるは、我々にとって甚く惜しまれるところである。その間の消息は、同じきその「後記」が明かしているが如くである。が、それはそれとして―、現実の当該書は、第一部「中国音韻学の研究」、第二部「越南漢字音の研究」なる二部構成を採っている。しかし、その前者は、実質的には両様のものを含む。即ち、一はその標題下に収まるものであり、他は越南語学に属するもの、つまり、其処に於けるその音と文字とに関するものである。対して、その後者、第二部は、曽てのその名の名著（今を去る事二十有余年）の覆刻、再版である。斯かれば、著者のその言語学プロパーのもの―それが幾許程のものか、私は皆目存知せぬが―以外にての、略々根幹的なるところは茲に収録せられていると推されるのである。

さて、今、更めて熟々慮るに、言語学科教授としての著者の、その右の如きの当書であれば、それに就きての書評には、本来的には言語学、乃至、中国語学上よりしての適切なる専家が他に幾らもいるはずである。それにも拘らずに、敢えて一介の国語学徒に過ぎぬ私にそれが課されしには、自ずからにその視野に限界の存する事となる。そして、それも亦それで理の当然である。因りて、所謂漢字文化圏の内の一つ、日本に於ける漢字の音の研究に従事する者として、その視点より本書に専らに対峙するの外は無きのである。

として、先ず最初に吐露すべきの感懐は、右述の漢字文化圏に属する三者の、その漢字の音の中、朝鮮のには、既に（昭和四十三年、一九六八）河野六郎の著があり、また、越南のには、それに後れる事四年にして（昭和四十七年）、本著者三根谷の専書（本書第二部）が存するに対して、我が国のには、その両者に拮抗する程のものを未だに欠くという点である。その所以の最大なるものは―無論、右の三者には種々の条件が絡み合っていて、その有り様は三者三様と言っつべきではあるけれども―、とにかくに、前二者は、それぞれに独自の中古中国音体系を樹立し、そして其処より出立されるに反して、

遺憾ながらも我が方は、それをなし得ていぬという、その所に求め得ると思われる。斯かる視点よりせば、日本漢字音の方も亦、何時の日にか、借り物ならぬ、自発的なる独自の彼土中古音体系の構築の上に立脚して、さて脚下照顧宜しく、我が方のものの鳥瞰が成就さるべきである。私としては従前、その事を考え続けては来たが、今度(こたび)また本書に対面して、弥が上にもその感が昂揚せしめられる。やはり、国語学のみの領域に齷齪(あくせく)と跼る限り、所詮それは井底の蛙に留まるしかない。須らく吾人は一般言語学なる大海にて泳ぐに力めるべきである。別して、当面、対象は、土台、日・中両国語に相亘る学際的 interdisziplinär なる拡がりを有するものである。その事に自覚的にならばなる程に、右の極めて大事たるは自明である。その意味では、本書は、我々の今後に大いなる指針を与えるものでもある。本稿の劈頭に、三根谷言語学の全貌の開陳を甚く冀求せしのも、実は茲に底意を有するが故にであった。因みに付帯するに、かの有坂秀世の偉大さは茲に連繋して一段と際立つものとなる次第である。

二

本書の第一部は、十四編の論文より成る。その内訳は、九編の中国語学(「韻鏡と越南漢字音」を便宜上含める)と、五編の越南語学とである。その発表年次は、昭和二十四年(一九四九)の「軽唇音化の問題」より始まりて、昭和五十七年(一九八二)の「韻鑑序例考」に終わる。その間三十三年に相亘る(第二部の従前の主著は、この最終論文の十年前のものである)。さて、これらの諸編は、恐らく著者のエキス Extrakt の集成と言い得るものであろう。その点、既に河野六郎の「序」で、「各篇」「珠玉の如き」と形容もされている通りである。茲に吾人は、語学論文としての一つの模範を見るの思いがする。その緻密さ、犀利さ、体系性、論理性、等々、何れの面にても、以て亀鑑となすべきに値するが故にである。その事を体感しつつ、一々の論文を追い行くに―先ず、本書の中国音韻学関係のもののその力点は、『韻鏡』の本質の解明にある。その事は、その論題の多くが、それに関わっているのを以てしても明白である。そして、それを象徴するかの如くにして、本書の筆頭には、大学での国語学特殊研究の講義録「韻鏡新講」が、「韻鏡と中古漢語」と改題して据えられているのである。これは、年次上は、最終のものと言ってもよい(大学での講義は、昭和五十六年と五十九年とに行われている。その間に、昭和五十七年の「韻鑑序例考」が位置する)ものたるが故に、蓋し、茲に著者のこのテーマに関する精髄が窺知し得る事となる。が、同時にそれは裏返せば、此処を巡る主要諸問題の集合でもこれはある訳である。因りて、今、暫時茲に滞留するに、これは、最初にI序説として、字音に関する諸問題の考察の拠り所としての韻鏡が世に云為されるが、しかし、II中古漢語の音韻体系は、その韻鏡を離れて、切韻―広韻の反切の体系より再構されるものでなければならぬ。として、そのために、陳澧以降の諸説の紹介、批判が展開され、その上に立っての三根谷体系の呈示に至る。そして、最後はIII韻鏡の術語に就きてである。俗に「韻鏡十三年」等と称して、その本質把握の至難事たるが喧伝されるけれども、さればとて、その十三年を経ば分かるという体の代物にてはこれはあらぬ。それの清楚なる解決にはなお道遠きのが現状である。されど、その書は結論的には「新しい音韻体系に即しつつ、時に外国語の知識に助けられながら、伝統

的な韻書の体系を整理したもの」なりと看破する著者に従えば、その示唆の線を延伸して、まだ別途の解明が新たに可能になるの期待が抱かれそうである。但し、右の本書の「結論」は、特に目新しきものではない。大略斯かるが如き事はこれまでに指摘されては来た。が、別しては、その半ば辺りに言われる「外国語の知識」、或いはまた、他の箇所で、胡僧の解釈、胡僧の耳等と記される、その面の強調は、独自の三根谷節と言っつべきものである。私見では、其処に注目したい。それを踏まえて、胡僧から華僧、そして、それら仏徒に依る伝承のルート（die Route）の探索は未だ充分に行われたとは言い難い。[注1] さらば、それに活路は見出し得ぬものか、と思量するのである。

右は些かに先走ってしまいしがため、茲で少しく後戻りするに、そのIIの中古漢語の音韻体系では、重紐問題は如何としても回避し得ぬものである。その諸説は、私としても既に纏めているが（『日本漢字音概論』。また、日本漢字音の音形・声母論—日本文芸研究44・3）、著者の立場は声母に二系を立てるものである。これは、介音の口蓋性の強弱の相違は声母に於ける口蓋化の強弱のそれに作用する。茲からその声母口蓋化の要素の強弱を重視するの解釈を導出する。これにて、重紐声母の場合は見事に解き得るが、対する非重紐の方では、未だ確乎とせぬところが残る。著者の考えとしては、陸志韋に近きかと推されはするけれども。そして、此処にて刮目すべきは、その藤堂明保説に対する批判である。即ち、その藤堂は重紐をして、介音と主母音との差に帰せしむる者であるが、その両要素を立てるに対して、それは「音韻論的解釈としては無用の論である。介音の違いとする説も、母音の違いとする説も、音声的実現としては、その双方に違いが見られる事を否定しているのではなく、相互の影響を見た上で、音韻論的にその差異を何れの位置に認めるかという事で説が分かれているのである」と、著者は極めて手厳しく評する。その「音韻論的解釈」とは抑々如何なるものか、に就きて、私等には改めて頂門の一針として、以て銘すべきの一言と右はなるのである。

この論は、必然、以前の「韻鏡の三・四等について」（本書所収）に開陳されしものであり、そして、茲に基づきて、著者の声母体系は出来する事となる。それは、陳澧の四十、カールグレンの四十七、陸志韋の五十一、また、李栄の三十六声類に対する、四十六類である。これは、直接的には右の最後者、李栄の批判的帰結である（表面上は、李栄の三十六に、重紐声母十を加えた数）。

一方、その韻母体系は、やはり先論「中古漢語の韻母の体系——切韻の性格——」（本書所収）に詳述されしところのものである。それは、藤堂説より出発する。従って、これ亦、或意味にては、その音韻論的批判よりする、彼の説を克服せんとするもの以外の何物でもなき事となる。概説せば、それは、藤堂の主母音音素七種に四呼（開合斉撮）を掛けて成る二十八欄体系より出でて、それをば可能な限り空欄の少なき、均斉の取れたものという観点から見直すところに始まる。その際、最初に着手されるのは、唯一つしかなき／ɔ／の江韻であり、これを／u／に依って、前の母音、後の子音の円唇性を示す／auŋ／に修正する。されば、これは連鎖的に相隣りする／o／の八韻（東冬鍾尤侯魚虞模）に波及する事となり、斯くて、畢竟、／ɔ／／o／の都合九韻が、他の母音の空欄の箇所に動かされる。さてして、五母音に依る十八段なる三根谷体系は成立するのである。

右の、その端緒となりし江韻は、古来、最も問題となる(kontroverse, umstritten)ものの一つで、誰しもその措置に迷い惑わされる難物なるも、それに一仮説を出だして以てそれから全韻母体系に敷衍し行くのその思考法、論法は、またそれで一つの哲学を教授するものの如くである。私は其処らに甚だしく惹き付けられ、吸引される。されど、反面、成程これは kompakt なるものではあるが、しかし、現実的に適応さすには如何、と多少傾首すべきの感が残るのは否定し難い。就中に、我々、日本漢字音の枠組みより発想する者にとりては、右にはそう素直に、単簡には従い得ぬところがある。即ち、例せば、その／a／の系列では、歌泰談寒唐冬韻、／ʌ／では、咍侯覃痕登東韻　等と並ぶが故にである。所謂音韻論的考察が intellectual sport (das intellektuelle Spiel)[注2]に堕するの行き過ぎという点に関しては著者自身に十分なる覚悟がある。さる自覚を有せる著者の、いわば最大限度の解釈で右はなきかと思われる。さりながらも、それに対して且うは大いに尊重はするも、且うは一抹の危懼が私には払拭し切れぬのである。因りて、斯かる目下の私の真情を茲に記し留め置く。

ところで、右の如きの声母体系、韻母体系が、第二部「越南漢字音の研究」の基礎 (Basis) となる。言を俟つまでもなく、この尺度で以て、中・越の対比は行われる。斯かる自己自身製作の準縄にて万般が計測し得るのは、非常なる強味である。其処には確固たる一貫性がある。されば、磐石の如くにして容易には揺動し難い。蓋し、その書が「名著」と称揚されて宜なる哉である。が、それにはまた後に触れるとして、今は再びその III 韻鏡の術語の章を見て置かねばならぬ。この韻図は極めて重宝なるがため、古来、寧ろ無反省に利用されて来過ぎた。その実、その本質は悉皆把握し切られてはいない。それに対する先述の如き著者の見解であった。彼の先輩河野は、その如きを最上級の形容で以て讃嘆する(「その本質を本当の意味で把握した人は、著者の三根谷氏を措いてはいない」—序)。しかしながら、そうとしても、実はその術語 Terminus technicus の真意が今茲で全く解明された訳ではない。私見に依れば、その意味ではそれは未だ用語 Wendung (Ausdruck) の域に留まる、となる。これが今後術語にまで昇華せしめられるには、この源流に鑑みて、やはり悉曇学辺りに深く侵入すべきの要がある。三根谷は、胡僧の事を屢々云為するけれども、その有する学に関しては殆ど何も言わぬ。従って、それは早晩超克されねばならない。その暁にこそ、新境地には至り得るのである。

三

右の如きの韻鏡に於ける、その具体的なる個別論として、「韻鏡における歌戈韻の位置」が展開される。これは要は、この果摂歌戈韻(一等—二十七・二十八転)が、仮摂麻韻(二等—二十九・三十転)と同転図にはならずに、別々に配置されるところに、この韻図と切韻との間の体系のずれが如実に認められるというものである。即ち、通例に倣わば、斯かる一・二等(a a)は、同一転図に配し得るはずである。しかるに、それに反するは、この前者の主母音が韻鏡時代に／ɔ／に変じていたからに他ならぬ、と解される。しかも、この両者間には、その内・外転なる差が存する。若しも、前者にその主母音の変動が無くんば、それは必然、外転であらねばならぬ。それが、またさに非ざる(内転)は、内・外転の差違が母音の差である限り、不

可説の事となる。として、茲から発展的に、当該書韻鏡全般の内・外転の検討に移り行く。実は、この内・外転とて、当面未解決の術語（用語）の最たるものの一であって、既に幾許かの説が出だされている。その中、羅常培の内外高低説が採られる事が多きも、他には、峯村三郎・藤堂明保の内外深浅説も存する。それらを批判する三根谷説は、外転をａａæｅとして、それ以外を内転とするものである。これは恰かも、右二説の中間的な貌ではあるが、外転の領域はやや狭められる。これを基点とせば、中古中国音十六韻摂の中で、今問題の果・仮摂以外に、なお、江止臻宕摂が引っ掛かる。しかし、茲で、止摂が、［i］で、「前舌母音であるから、外転に入りそうなものだが、中舌的であった可能性もあり、一応ə—a—æ—ɐの系列以外のものとして内転とされる事も不可能ではない」とされるのは、よくは納得し得ぬ。つまり、／i／は、内、外転何れに属するものなのかは、本論では明確にされておらぬが故にである。

この如くにして、問題の韻摂は著者の側では解決され行くが、臻摂のみは最後まで残る。これらには諸本の校合とて決して絶対的とは言い難きものが揺曳するが、李新魁の『韻鏡校證』では、それを内転と決定する。無論、三根谷とて、これが内転ならば問題は無きのである（特にこれには補注が付される）。茲でやはり著者の厳密なる資料観が窺える。恣意的にはその記載が動かされぬが故にである。されど、先の果摂歌戈韻に戻るに、其処では、例の胡僧の耳なる点に一切触れてなきは、如何とせし事か。一寸気懸りである。

そう言えば、類似の移動には、外に、廃韻の位置がある。これに関しては、既に拙稿にて披瀝せしが如くである（ヴェンクの日本漢字音研究に就いて—日本文芸研究44・2）が、本書では、その言及がない。それは、当書が韻鏡専一の研究書にてはあらぬが故に、その一々に就きては記す事はなく、その一斑を示すのみで以て、その全豹は後学がトすべきものなのであろうと推する。但し、その韻鏡での、蒸登韻を最後に置くという、その韻の排列に関しては、著者の口よりして直に聞きたきものであった。それが見えぬは寂しき限りである。著者に何等かのその知見の無いはずはないが故に。

その三根谷の韻鏡論に就きては、最後になお二つの特点を記して置かねばならぬ。その一は、漢越語（越南漢字音）に於ける独特の（eigenartig）声調の対応—その平・仄声の中の「清濁」音間に齟齬を来たせる事—よりして、当該韻図は、儒家の標準音とは異なる仏家の伝統を反映するものである、と帰結する点である（韻鏡と越南漢字音）。これは、これまでに述べて来し胡僧の関与という事と深く連結せしめて、其処より波及する問題は甚大なものとなる。その二は、何故に別しては日本にてこの書が持て囃されしかに対する洞察である。そは簡潔には、我が字音仮名遣のための根拠とせしが故にであると言う（韻鑑序例考）。無論、俗間では、人名反切に用いられる事も多かったのではあるけれども、最も有効適切なるその利用は、宣長の『字音仮字用格』にその典型を見るが如くなのである。茲より顧みる時、その三根谷説の正当性は自ずからに首肯され得る。

ところで、右の如きにのみ何時までも拘泥している訳には行かぬが故に、一旦、茲で目を転じて、本書第一部の後半、越南語学関係を見るに、これは、著者自身の「あとがき」にもあるが如く、「非専門家に向けて書かれたもの」という本性上、甚だ啓蒙的である。因りて、私の如きその完全なる門外漢にとりては、これはいとも有り難き読み物であった。そして、その越南語に関しては、最低限ここ

らの知識を拠点として、次いで、第二部「越南漢字音の研究」に入り行く事とする。この一編は、das Sino-japanische 研究に携わる私としては、同じき範疇の das Sino-vietnamesische であるが故に、その基盤たる中古中国音の一つの在り様を示唆するものとして、兼ねてより常々参看し来たれるものである。それは、当該の研究法から説き起こし、先行研究とその資料を整備し、さて、先に見た著者独自の中古漢語体系よりして漢越語を照射して、その成立を論ずるに至る。その狙いは、当越南の如きその言語史料の乏しき所での、その一大材料たる字音に依る音韻史解明にあるが、何と言い条、それは固有のものでなきが故に、勢い、かなり幅広き蓋然性を有する推定に留まらざるを得ぬ点がある。因って、この成果には大いなる限界が存するはずである。が、著者は先刻その辺りの事は十分に押さえている。その上での立論には、大いに頼り甲斐がある。ために、私等は、寧ろ無条件に従前それに従って来た訳である。その字音は、常軌に則って、声母、韻母、及び声調の三方面に分かちて綺麗に纏められている。有り体に告白せば、私は―幾度か反復するが―、越南語は皆目解さぬ者である。さるに依って、この細部に就きて容喙して詮無きに終わるを避け、代わりて、若干の疑問点と啓発されし点とに関して記す事とする。

先ず前者は、「文献に依る言語史は、書かれた言語の読み方である〝読音〟の歴史を反映するものである」は当前の事ながらも、その「規範とする〝読音〟を改める」（III中古漢語）事があるのは、一体、那辺にその因が求められるのであろうか、という疑念である。例えば、具体的には、玄応（初唐）と慧琳（中唐）とのその両者間の「際立った体系的差異」に就きての解釈がある。それをしも、「大きな音韻変化」には非ずして、単に規範読音の更改のみで以て済まし得るものなるや、否や。何が故に、その読音は改められるものか。現実音は何等反映されぬのか。尋常には、現実が動くがために、その情勢に叶うべく、規範が見直されるには非ざるか。この際、殊更に彼土唐代にては、玄宗の盛唐以降、その長安音は全き標準音に昇華する。さる程の激変する現実に果たして背ける儘にて此処は宜しきとは、一寸考え難く思われるのである。

として、翻って本書より啓発さるるの点は多々あるも、その中の私にとっての新知識となるものを挙ぐるに、右に因む慧琳音義にて、韻母には旧呉音ならぬ新秦音が示されるに反し、一方、声母の面では、伝統を変えずに守旧的であるのは、何ともこれまで不可思議的であった。それをば三根谷は、対梵音関係にて説き明かさんとする。即ち、韻母は新しいものでも（梵語に）十分対応し得るに対して、声母はさに非ず、と。私は当時の梵音にも暗きが故に、今はこれを信憑するしか他に手立てはない。が、成程、これには斯かる面からも迫り得るのかと、一旦ははたと膝を打ちしのである。

別には、漢越語が仏教と共に導入されたという指摘がある。其処よりして、その仏典読みが越語化される。斯かれば、例の漢字文化圏たる朝鮮、日本と共に、その三者は正に揆を一にして、中国の漢字とその音とを摂取し始めた事となる。加之、越南には諧声音符読みもあると言う。これは当然至極のようでもあるが、しかし、我が国に反して、韻鏡の如き規則的に字音を導出する拠り所は持っていなかったらしい。ここらは仲々に興味の尽きざる諸事象である。その漢字文化圏でも、軈て、越南は字喃を経てローマ字へ、序でに、朝鮮でも諺文が創出されて、漢字は衰退するの運命下に晒される。

対して、それが保全されるのは独り我が国のみである。当初、歩調を等しうしていた右三者は、斯くて、漸次それぞれに三途を辿って今日に至る事となる。これらを巡る諸問題は、茲とはまた別次元のものではあるが、本書から発展的に得しめられる一大課題として、仮令今は画蛇添足とはなろうとも、敢えてこれは削らずに置く。

さて、指定枚数が詰まって来た。その有頭無尾たるは自認の上で茲で締め括らねばならぬ。本書の書評の依頼を受けて以来、私は我がためにと張り切ってこの書を繙き、意気込んでこの筆を執りしのであるが、所詮、菲才の身。如何程本書の真価[注3]を記し得たか、甚だ覚束ない。それをば、書は言を尽くさず、言は意を尽くさずと託(かこ)つけて、以てその弁解の辞と致したい。なお、最後に付帯するに、本書にもやはり、書名、術語等の、最小限にでもその索引は入用である。これが論文集であるだけに、それだけに記述の重複が存する。かるが故に、その検索の便を得るがためにである。

注1　このIIIに関わるところでは、三根谷門下生に依る、その継承、整理の試みが始められている。
小倉肇―韻鏡の術語（1）（弘前大国語国文学14）
清水史―反切と韻図（愛媛大人文学会創立15周年記念論集）

注2　カールグレン―Compendium of Phonetics in Ancient and Archaic Chinese―華訳（張洪年）では「智力遊戯」。これに就き亀井孝は言う「音韻論が行き過ぎて、真実追求の人間の精神を疎外して専門家の手品にならなければ幸せである」（ガ行のかな―同論文集3所収）。

注3　当該分野にて「数々の新見解を提示した本書は、正に…言語学上の輝かしい業績の一つと言えよう」（汲古23）―この推薦の言、我を欺かず、である。

（平成五年五月二十五日発行　汲古書院刊　A5判　五四八頁　一二〇〇〇円）

――関西学院大学教授――

（平成六年四月五日　受理）